

## 狼森と策森、盗森

小岩井農場〔こいはるのうぢやう〕の北〔きた〕に、黒〔くろ〕い松〔まつ〕の森〔もり〕が四つあります。いちばん南〔みなみ〕が狼森〔オイノもり〕で、その次〔つぎ〕が策森〔ざるもり〕、次〔つぎ〕は黒坂森〔くろさかもり〕、北〔きた〕のはづれは盗森〔ぬすともり〕です。

この森〔もり〕がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体〔きたい〕な名前〔なまへ〕がついたのか、それをいちばんはじめから、すつかり知〔し〕つてゐるものは、おれ一人〔ひとり〕だと黒坂森〔くろさかもり〕のまんなかの巨〔おほ〕きな巖〔いは〕が、ある日〔ひ〕、威張〔ゐば〕つてこのおはなしをわたくしに聞〔き〕かせました。

ずうつと昔〔むかし〕、岩手山〔いはてさん〕が、何〔なん〕べんも噴火〔ふんくわ〕しました。その灰〔はい〕でそこらはすつかり埋〔うづ〕まりました。このまつ黒〔くろ〕な巨〔おほ〕きな巖〔いは〕も、やつぱり山〔やま〕からはね飛〔と〕ばされて、今〔いま〕のところに落〔お〕ちて来〔き〕たのださうです。

噴火 [ふんくわ] がやつとしづまると、野原 [のはら] や丘 [おか] には、穂 [ほ] のある草 [くさ] や穂 [ほ] のない草 [くさ] が、南 [みなみ] の方 [ほう] からだんだん生 [は] えて、たうたうそこらいつぱいになり、それから柏 [かしは] や松 [まつ] も生 [は] え出 [だ] し、しまひに、いまの四 [よ] つの森 [もり] ができました。けれども森 [もり] にはまだ名前 [なまへ] もなく、めいめい勝手 [かつて] に、おれはおれだと思 [おも] つてゐるだけでした。するとある年 [とし] の秋 [あき]、水 [みづ] のやうにつめたいすさとほる風 [かぜ] が、柏 [かしは] の枯 [か] れ葉 [は] をさらさら鳴 [な] らし、岩手山 [いはてさん] の銀 [ぎん] の冠 [かんむり] には、雲 [くも] の影 [かげ] がくつきり黒 [くろ] くうつゝてゐる日 [ひ] でした。

四人 [よにん] の、けら [ゝゝ] を着 [き] た百姓 [ひやくしやう] たちが、山刀 [なた] や三本鍬 [さんぼんぐは] や唐鍬 [たうぐは] や、すべて山 [やま] と野原 [のはら] の武器 [ぶき] を堅 [かた] くからだにしばりつけて、東 [ひがし] の稜 [かど] ぼつた燧石 [ひうちいし] の山 [やま] を越 [こ] えて、のつしのつしと、この森 [もり] にかこまれた小 [ち] さな野原 [のはら] にやつて来ました。よくみるとみんな大 [おほ] きな刀 [かたな] もさしてゐたのです。

先頭 [せんとう] の百姓 [ひやくしやう] が、そこらの幻燈 [げんとう] のやうなけしきを、みんなにあちこち指 [ゆび] さして「どうだ。いゝとこだらう。畑 [はたけ] はすぐ起 [おこ] せるし、森 [もり] は近 [ちか] いし、きれいな水 [みづ] もながれてゐる。それに日 [ひ] あたりもいゝ。どうだ、俺 [おれ] はもう早 [はや] くから、こゝと決 [き] めて置 [お] いたんだ。」と云 [い] ひますと、一人 [ひとり] の百姓 [ひやくしやう] は、

「しかし地味 [ちみ] はどうかな。」と言 [い] ひながら、屈 [かゞ] んで一本 [いつぼん] のすゝきを引 [ひ] き抜 [ぬ] いて、その根 [ね] から土 [つち] を掌 [てのひら] にふるひ落 [おと] して、しばらく指 [ゆび] でこねたり、ちょつと嘗 [な] めてみたりしてから云 [い] ひました。

「うん。地味 [ちろ] もひどくよくはないが、またひどく悪 [わる] くもないな。」

「さあ、それではいよいよこゝときめるか。」

も一人 [ひとり] が、なつかしさうにあたりを見 [み] まはしながら云 [い] ひました。

「よし、さう決 [き] めやう。」いまゝでだまつて立 [た] つてゐた、四人目 [よにんめ] の百姓 [ひやくしやう] が云 [い] ひました。

四人 [よにん] はそこでよろこんで、せなかの荷物 [にもつ] をどしんとおろして、それから来 [き] た方 [ほう] へ向 [む] いて、高 [たか] く叫 [さけ] びました。

「おゝい、おゝい。こゝだぞ。早 [はや] く来 [こ] お。早 [はや] く来 [こ] お。」

すると向 [むか] ふのすゝきの中 [なか] から、荷物 [にもつ] をたくさんしよつて、顔 [かほ] をまつかにしておかみさんたちが三人 [さんにん] 出 [で] て来 [き] ました。見 [み] ると、五 [いつ] つ六 [む] つより下 [した] の子供 [こども] が九人 [くにん]、わいわい云 [い] ひながら走 [はし] つてついて来 [く] るのでした。

そこで四人 [よつたり] の男 [をとこ] たちは、てんでにすきな方 [ほう] へ向 [む] いて、声 [こゑ] を揃 [そろ] へて叫 [さけ] びました

「こゝへ畑起 [はたけおこ] してもいゝかあ。」

「いゝぞお。」森 [もり] が一斉 [いつせい] にこたへました。

みんなは又叫 [またさけ] びました。

「こゝに家建 [いへた] てゝもいゝかあ。」

「ようし。」森 [もり] は一 [いつ] ぺんにこたへました。

みんなはまた声 [こゑ] をそろへてたづねました。

声 [こゑ] を揃 [そろ] へて叫 [さけ] びました

「こゝで火 [ひ] たいてもいいかあ。」

「いゝぞお。」森 [もり] は一 [いつ] ペんにこたへました。

みんなはまた叫 [さけ] びました。

「すこし木貫 [きいもら] つてもいゝかあ。」

「ようし。」森 [もり] は一斉 [いつせい] にこたへました。

男 [をとこ] たちはよろこんで手 [て] をたゝき、さつきから顔色 [かほいろ] を変 [か] へて、しんとして居 [ゐ] た女 [をんな] やこどもらは、にわかにはしやぎだして、子供 [こども] らはうれしまぎれに喧嘩 [けんくわ] をしたり、女 [をんな] たちはその子 [こ] をぽかぽか撲 [なぐ] ったりしました。

その日 [ひ]、晩方 [ばんがた] までには、もう萱 [かや] をかぶせた小 [ちい] さな丸太 [まるた] の小屋 [こや] が出来 [でき] てゐました。子供 [こども] たちは、よろこんでそのまわりを飛 [と] んだりはねたりしました。次 [つぎ] の日 [ひ] から、森 [もり] はその人 [ひと] たちのきちがひのやうになつて、働 [はた] らいてゐるのを見 [み] ました男 [をとこ] はみんな鍬 [くわ] をピカリピカリさせて、野原 [のほら] の草 [く

さ] を起 [おこ] しました。女 [をんな] たちは、まだ栗鼠 [りす] や野鼠 [のねずみ] に持 [も] つて行 [い] かねない栗 [くり] の実 [み] を集 [あつ] めたり、松 [まつ] を伐 [き] つて薪 [たきぎ] をつくつたりしました。そしてまもなく、いちめんの雪 [ゆき] が来 [き] たのです。

その人 [ひと] たちのために、森 [もり] は冬 [ふゆ] のあいだ、一生懸命 [いつしやうけんめい]、北 [きた] からの風 [かぜ] を防 [ふせ] いでやりました。それでも、小 [ちい] さなこどもらは、寒 [さむ] がって、赤 [あか] くはれた小 [ちい] さな手 [て] を、自分 [じぶん] の咽喉 [のど] にあてながら、「冷 [つめ] たい、冷 [つめ] たい。」と云 [い] つてよく泣 [な] きました。

春 [はる] になつて、小屋 [こや] が二 [ふた] つになりました。

そして蕎麦 [そば] と稗 [ひえ] とが播 [ま] かれたやうでした。そばには白 [しろ] い花 [はな] が咲 [さ] き、稗 [ひえ] は黒 [くろ] い穂 [ほ] を出 [だ] しました。その年 [とし] の秋 [あき]、穀物 [こくもつ] がとにかくみのり、新 [あた] らしい畑 [はたけ] がふえ、小屋 [こや] が三 [み] つになつたとき、みんなはあまり嬉 [うれ] しくて大人 [おとな] までがはね歩 [ある] きました。ところが、土 [つち] の堅 [かた] く

凍 [こほ] つた朝 [あさ] でした。九人 [くにん] のこどもらのなかの、小 [ちい] さな四人 [よにん] がどうしたのか夜 [よる] の間 [あひだ] に見 [み] えなくなつてゐたのです。

みんなはまるで、気遣 [きちが] ひのやうになつて、その辺 [へん] をあちこちさがしましたが、こどもらの影 [かげ] も見 [み] えませんでした。

そこでみんなは、てんでにすきな方 [ほう] へ向 [む] いて、一諸 [いつしよ] に叫 [さけ] びました。

「たれか童 [わらし] やど知 [し] らないか。」

「知らない。」と森 [もり] は一斉 [いつせい] にこたへました。

「そんだらさがしに行 [い] くぞお。」とみんなはまた叫 [さけ] びました。

「来 [こ] お。」と森 [もり] は一斉 [いつせい] にこたへました。

そこでみんなは色々 [いろいろ] の農具 [のうぐ] をもつて、まづ一番 [いちばん] ちかい狼森 [オイノもり] に行きました。森 [もり] へ入 [はい] りますと、すぐしめつたつめたい風 [かぜ] と朽葉 [くちば] の匂 [におひ] とが、すつとみんなを襲 [おそ] ひました。

みんなはどンドン踏 [ふ] みこんで行 [い] きました。

すると森 [もり] の奥 [おく] の方 [ほう] で何 [なに] かパチパチ音 [おと] がしました。

急 [いそ] いでそつちへ行 [い] つて見 [み] ますと、すさとほつたばら色 [いろ] の火 [ひ] がどンドン燃 [も] えてゐて、狼 [オイノ] が九疋 [くひき]、くるくるくる、火 [ひ] のまはりを踊 [をど] つてかけ歩 [ある] いてゐるのでした

だんだん近 [ちか] くへ行つて見 [み] ると居 [ゐ] なくなつた子供 [こども] らは四人共 [よにんども]、その火 [ひ] に向 [む] いて焼 [や] いた栗 [くり] や初茸 [はつたけ] などをたべてゐました。

狼 [オイノ] はみんな歌 [うた] を歌 [うた] つて、夏 [なつ] のまはり燈籠 [とうろう] のやうに、火 [ひ] のまはりを走 [はし] つてゐました。

「狼森 [オイノもり] のまんなかで、

火 [ひ] はどろどろぱちぱち

火 [ひ] はどろどろぱちぱち、



栗 [くり] はころころぱちぱち、

栗 [くり] はころころぱちぱち。」

みんなはそこで、声 [こゑ] をそろへて叫 [さけ] びました。

「狼 [オイノ] どの狼 [オイノ] どの、童 [わら] しやど返 [かへ] して呉 [け] ろ。」

狼 [オイノ] はみんなぴつくりして、一 [いつ] ペんに歌 [うた] をやめてくちをまげて、みんなの方 [ほう] をふり向 [む] きました。

すると火 [ひ] が急 [きふ] に消 [き] えて、そこらはにわかにか青 [あを] くしいんとなつてしまつたので火 [ひ] のそばのこどもらはわあと泣 [な] き出 [だ] しました。

狼 [オイノ] は、どうしたらいゝか困 [こま] つたといふやうにしばらくきよろきよろくしてゐましたが、たうたうみんないちどに森 [もり] のもつと奥 [おく] の方 [ほう] へ逃 [に] げて行 [い] きました。

そこでみんなは、子供 [こども] らの手 [て] を引 [ひ] いて、森 [もり] を出 [で] やうとしました。すると森 [もり] の奥 [おく] の方 [ほう] で狼 [オイノ] どもが、

「悪 [わる] く思 [おも] わないで呉 [け] ろ。栗 [くり] だのきのこだの、うんとご馳走 [ちさう] したぞ。」と叫 [さけ] ぶのがさこえました。みんなはうちに帰 [かへ] つ

てから粟餅〔あわもち〕をこしらへてお礼〔れい〕に狼森〔オイノもり〕へ置〔を〕いて来〔き〕ました。

春〔はる〕になりました。そして子供〔こども〕が十一人〔にん〕になりました。馬〔うま〕が二疋〔ひき〕来〔き〕ました。畠〔はたけ〕には、草〔くさ〕や腐〔くさ〕つた木〔き〕の葉〔は〕が、馬〔うま〕の肥〔こえ〕と一諸〔いつしよ〕に入〔はい〕りましたので、粟〔あわ〕や稗〔ひえ〕はまつさをに延〔の〕びました。

そして実〔み〕もよくとれたのです。秋〔あき〕の末〔すえ〕のみんなのよろこびやうといつたらありませんでした。

ところが、ある霜柱〔しもばしら〕のたつたつめたい朝〔あさ〕でした。

みんなは、今年〔ことし〕も野原〔のはら〕を起〔おこ〕して、畠〔はたけ〕をひろげてゐましたので、その朝〔あさ〕も仕事〔しごと〕に出〔で〕やうとして農具〔のうぐ〕をさがしますと、どこの家〔うち〕にも山刀〔なた〕も三本〔ほん〕も唐鍬〔たうぐわ〕も一〔ひと〕つもありませんでした。

みんなは一生懸命〔いつしやうけんめい〕そこらをさがしましたが、どうしても見附〔みつ〕かりませんでした。それぞ仕方〔しかた〕なく、めいめいすきな方〔ほう〕へ向〔む〕

いて、いつしょにたかく叫 [さけ] びました。

「おらの道具知 [だうぐし] らないかあ。」

「知 [し] らないぞお。」と森 [もり] は一ぺんにこたへました。

「さがしに行 [い] くぞお。」とみんなは叫 [さけ] びました。

「来 [こ] お。」と森 [もり] は一斉 [いつせい] に答 [こた] えました。

みんなは、こんどはなんにももたないで、ぞろぞろ森 [もり] の方 [ほう] へ行 [い] きました。はじめはまづ一番 [いちばん] 近 [ちか] い狼森 [オイノもり] に行 [い] きました。

すると、すぐ狼 [オイノ] が九疋 [くひき] 出 [で] て来 [き] て、みんなまじめな顔 [かほ] をして、手 [て] をせわしくふつて云 [い] ひました。

「無 [な] い、無 [な] い、決 [けつ] して無 [な] い、無 [な] い。外 [ほか] をさがして無 [な] かつたら、もう一 [いつ] ぺんおいで。」

みんなは、尤 [もつと] もだと思 [おも] っつて、それから西 [にし] の方 [ほう] の策森 [ざるもり] に行 [い] きました。そしてだんだん森 [もり] の奥 [おく] へ入 [はい] っつて行 [い] きますと、一本 [いつぽん] の古 [ふるい] い柏 [かしは] の木 [き] の下

「した」に、木「き」の枝「えだ」であんだ大「おほ」きな箒「ざる」が伏「ふ」せてありました。

「こいつはどうもあやしいぞ。箒森「ざるもり」の箒「ざる」はもつともだが、中「なか」には何「なに」があるかわからない。一「ひと」つあけて見「み」やう。」と云「い」ひながらそれをあけて見「み」ますと、中「なか」には無「な」くなつた農具「のうぐ」が九「ここの」つとも、ちゃんとはいつてゐました。

それどころではなく、まんなかには、黄金色「キンいろ」の目「め」をした、顔「かほ」のまつかな山男「やまをとこ」が、あぐらをかいて座「すわ」つてゐました。そしてみんなを見「み」ると、大「おほ」きな口「くち」をあけてバアと云「い」ひました。

子供「こども」らは叫「さけ」んで逃「に」げ出「だ」さうとしましたが、大人「をと」な「は」びくともしないで、声「こゑ」をそろえて云「い」ひました。

「山男「やまをとこ」、これからいたづら止「や」めて呉「け」ろよ。くれぐれ頼「たの」むぞ、これからいたづら止「や」めで呉「け」ろよ。」

山男「やまをとこ」は、大「たい」へん恐縮「きやうしゆく」したやうに、頭「あたま」をかいて立「た」つて居「を」りました。みんなはてんでに、自分「じぶん」の農具「の

うぐ] を取 [と] っつて、森 [もり] を出 [で] て行 [い] かうとしました。

すると森 [もり] の中 [なか] で、さつきの山男 [やまをとこ] が、  
「おらさも栗餅持 [あわもちも] っつて来 [き] て呉 [け] ろよ。」と叫 [さけ] んでくる  
りと向 [むか] ふを向 [む] いて、手 [て] で頭 [あたま] をかくして、森 [もり] のも  
つと奥 [おく] の方 [ほう] へ走 [はし] っつて行 [ゆ] きました。

みんなはあつはあつはと笑 [わら] っつて、うちへ帰 [かへ] りました。そして又栗餅 [ま  
たあはもゐ] をこしらえて、狼森 [オイノもり] と笹森 [ざるもり] に持 [も] っつて行 [い]  
っつて置 [を] いて来 [き] ました。

次 [つぎ] の年 [とし] の夏 [なつ] になりました。平 [たい] らな処 [ところ] はも  
うみんな畑 [はたけ] です。うちには木小屋 [きごや] がついたり、大 [おほ] きな納屋  
[なや] が出来 [でき] たりしました。

それから馬 [うま] も三疋 [さんびき] になりました。その秋 [あき] のとりいれのみ  
んなの悦 [よろこ] びは、とても大 [たい] へんなものでした。

今年 [ことし] こそは、どんな大 [おほ] きな栗餅 [あわもち] をこさえても、大丈夫  
[だいじやうぶ] だとおもつたのです。

そこで、やつぱり不思議 [ふしぎ] なことが起 [おこ] りました。

ある霜 [しも] の一面 [いちめん] に置 [を] いた朝 [あさ] 納屋 [なや] のなかの粟 [あは] が、みんな無 [な] くなつてゐました。みんなはまるで気 [き] が気 [き] でなく、一生 [いつしやう] けん命 [めい]、その辺 [へん] をかけまわりましたが、どこにも粟 [あは] は、一粒 [ひとつぶ] もこぼれてゐませんでした。

みんなはがっかりして、てんでにすきな方 [ほう] へ向 [む] いて叫 [さけ] びました。

「おらの粟知 [あはし] らないかあ。」

「知 [し] らないぞお。」森 [もり] は一ぺんにこたへました。

「さがしに行 [い] くぞ。」とみんなは叫 [さけ] びました。

「来 [こ] お。」と森 [もり] は一斉 [いつせい] にこたへました。

みんなは、てんでにすきなえ物 [もの] を持 [も] っつて、まづ手近 [てぢか] の狼森 [オイノもり] に行 [い] きました。

狼 [オイノ] 供は九 | 疋共 [ひきとも] もう出 [で] て待 [ま] っつてゐました。そしてみんなを見 [み] て、フツと笑 [わら] っつて云 [い] ひました。

「今日 [けふ] も粟餅 [あはもち] だ。こゝには粟 [あは] なんか無 [な] い、無 [な]

い、決 [けつ] して無 [な] い。ほかをさがしてもなかつたらまたこゝへおいで。」

みんなはもつともと思 [おも] つて、そこを引 [ひ] きあげて、今度 [こんど] は策森 [ざるもり] へ行 [い] きました。

すると赤 [あか] つらの山男 [やまをとこ] は、もう森 [もり] の入口 [いりぐち] に出 [で] てみて、にやにや笑 [わら] っつて云 [い] ひました。

「あわもちだ。あわもちだ。おらはなつても取 [と] らないよ。栗 [あは] をさがすなら、もつと北 [きた] に行 [い] っつて見 [み] たらよかべ。」

そこでみんなは、もつともだと思 [おも] っつて、こんどは北 [きた] の黒坂森 [くろさかもり]、すなはちこのはなしを私 [わたくし] に聞 [き] かせた森 [もり] の、入口 [いりぐち] に来 [き] て云 [い] ひました。

「栗 [あは] を返 [かへ] して呉 [け] ろ。栗 [あは] を返 [かへ] して呉 [け] ろ。」

黒坂森 [くろさかもり] は形 [かたち] を出 [だ] さないで、声 [こゑ] だけでこたへました。

「おれはあけ方 [がた]、まつ黒 [くろ] な大 [おほ] きな足 [あし] が、空 [そら] を北 [きた] へとんで行 [い] くのを見 [み] た。もう少 [すこ] し北 [きた] の方 [ほう]

へ行 [い] つて見 [み] ろ。」そして粟餅 [あはもち] のことなどは、一言 [ひとこと] も云 [い] はなかつたさうです。そして全 [まつた] くその通 [とほ] りだつたらうと私 [わたくし] も思 [おも] ひます。なぜなら、この森 [もり] が私 [わたくし] へこの話 [はなし] をしたあとで、私 [わたくし] は財布 [さいふ] からありつきの銅貨 [どうくわ] を七銭出 [しちせんだ] して、お礼 [れい] にやつたのですが、この森 [もり] は仲々 [なかなか] 受 [う] け取 [と] りませんでした、この位 [くらゐ] 気性 [きしやう] がさつぱりとしてゐますから。

さてみんなは黒坂森 [くろさかもり] の云 [い] ふことが尤 [もつと] もだと思 [おも] がつて、もう少 [すこ] し北 [きな] へ行 [い] きました。

それこそは、松 [まつ] のまつ黒 [くろ] な盗森 [ヌストもり] でした。ですからみんなも、

「名 [な] からしてぬすと臭 [くさ] い。」と云 [い] ひながら、森 [もり] へ入 [はい] がつて行 [い] つて、「さあ栗返 [あはかへ] せ。栗返 [あはかへ] せ。」とどなりました。

すると森 [もり] の奥 [おく] から、まつくろな手 [て] の長 [なが] い大 [おほ] きな大 [おほ] きな男 [をとこ] が出 [で] て来 [き] て、まるでさけるやうな声 [こゑ]



で云 [い] ひました。

「何 [なん] だと。おれをぬすだと。さふ云 [い] ふやつは、みんなたゝき潰 [つぶ] してやるぞ。ぜんたい何 [なに] の証拠 [しやうこ] があるんだ。」

「証人 [しやうにん] がある。証人 [しやうにん] がある。」とみんなはこたへました。

「〔唯 [たれ]〕だ。畜生 [ちくしやう]、そんなこと云 [い] ふやつは誰 [たれ] だ。」

と盗森 [ヌストもり] は咆 [ほ] えました。

「黒坂森 [くろさかもり] だ。」と、みんなも負 [ま] けずに叫 [さけ] びました。

「あいつの云 [い] ふことはてんであてにならん。ならん。ならん。ならんぞ。畜生 [ちくしやう]。」と盗森 [ヌストもり] はどなりました。

みんなももつともだと思 [おも] つたり、恐 [おそ] ろしくなつたりしてお互 [たがひ] に顔 [かほ] を見合 [みあは] せて逃 [に] げ出 [だ] さうとしました。

すると俄 [にはか] に頭 [あたま] の上 [うへ] で、

「いやいや、それはならん。」といふはつきりした巖 [おごそ] かな声 [こゑ] がしました。

見 [み] るとそれは、銀 [ぎん] の冠 [かんむり] をかぶつた岩手山 [いはてさん] で

した。盗森 [ヌストもり] の黒 [くろ] い男 [をとこ] は、頭 [あたま] をかゝへて地 [ち] に倒 [たほ] れました。

岩手山 [いはてさん] はしづかに云 [い] ひました。

「ぬすとはたしかに盗森 [ヌストもり] に相違 [さうゐ] ない。おれはあけがた、東 [ひがし] の空 [そら] のひかりと、西 [にし] の月 [つき] のあかりとで、たしかにそれを見届 [みとど] けた。しかしみんなももう帰 [かへ] っつてよからう。粟 [あは] はきつと返 [かへ] させよう。だから悪 [わる] く思 [おも] はんで置 [を] け。一体 [いつたい] 盗森 [ヌストもり] は、じぶんで粟餅 [あはもち] をこさえて見 [み] たくてたまらなかつたのだ。それで粟 [あは] も盗 [ぬす] んで来 [き] たのだ。はつはつは。」

そして岩手山 [いはてさん] は、またすましてそらを向 [む] きました。男 [をとこ] はもうその辺 [へん] に見 [み] えませんでした。

みんなはあつけにとられてがやがや家 [うち] に帰 [かへ] っつて見 [み] ましたら、粟 [あは] はちやんと納屋 [なや] に戻 [もど] っつてゐました。そこでみんなは、笑 [わら] っつて粟 [あは] もちをこしらえて、四 [よ] つの森 [もり] に持 [も] っつて行 [い] きました。

中 [なか] でもぬすと森 [もり] には、いちばんたくさん持 [も] つて行 [い] きました。その代 [かは] り少 [すこ] し砂 [すな] がはいつてゐたさうですが、それはどうも仕方 [しかた] なかつたことせう。

さてそれから森 [もり] もすつかりみんなの友 [とも] だちでした。そして毎年 [まいねん]、冬 [まゆ] のはじめにはきつと栗餅 [あはもち] を貰 [もら] ひました。

しかしその栗餅 [あはもち] も、時節 [じせつ] がら、ずゐぶん小 [ちい] さくなつたが、これもどうも仕方 [しかた] がないと、黑板森 [くろさかもり] のまん中 [なか] のまつくろな巨 [おほ] きな巖 [いは] がおしまひに云 [い] つてゐました。

■このファイルについて

標題：狼森と笨森、盜森

著者：宮澤賢治

本文：「注文の多い料理店」

発行：大正十三年十二月一日

販売元：杜陵出版部／東京光原社

新選 名著復刻全集 近代文学館 昭和51年4月1日 発行  
(第14刷)

表記：原文の表記を尊重しつつ、以下のように扱います。

○誤字・脱字等は訂正せず、底本通りとしました。

○本文のかなづかいは、底本通りとしました。

○旧字体は、現行の新字体に替えました。ただし、新字体に替えなかった漢字もあります。

新字体がない場合は、旧字体をそのまま用いました。

○繰り返し記号／＼は用いず、同語反復としました。

入力：今井安貴夫

ファイル作成：里実工房

公開：2005年9月21日